平仮名「はね」の難易度と児童の発達段階
―学習教材開発のための基礎研究―

信州大学　小林　比出代

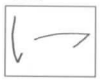
はじめに　―本論考の意図―

筆者は本学会で継続的に発表した先行研究〔①「未就学児の硬筆筆記具の持ち方に関する一考察 ―書写教育の視点から―」(2009)　②「未就学児の硬筆筆記具の持ち方と書かれた点画の発達段階における変化」(2010)　③「小学校書写用教科書（第１学年）における平仮名での「はね」の扱いに関する一考察」(2011)〕で以下の点を指摘した。

○硬筆筆記具（以降「筆記具」．上記拙稿及び本論考での調査の場合鉛筆）をどのように持つかの別に関係なく、就学前の幼児にとって、平仮名の「はね」「曲がり」「結び」は形・用筆ともに理解が難しいこと。

○中でも、幼稚園年長児が「はね」を再現できる割合は、他の２つの要素に比べて著しく低いこと。〈例〉

○「はね」に代わって高い割合で表れるのは、「はね」が新たな縦ないしは横（あるいは斜め方向）の一画のようになる書き方（※〈例〉参照）であること。

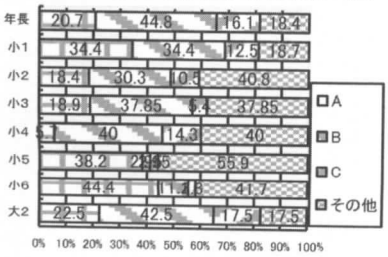


小学校での文字学習が始まる前の段階にある幼児が筆写するのに最も苦戦する点画要素「はね」を、就学後間もない文字学習入門期の児童はどのように再現するのか。そこに幼稚園年長児との違いは存在するのか。仮に両者の間に明確な差異はないとしても、例えば小学校高学年で「はね」を先述の幼児特有な書き方で表す児童は低学年での比率よりは低いと推測できる。それでは、「はね」に関して特別な指導を行わなくても、先述の「はね」を「折れ」のように再現する書きぶりから「はね」として理解し筆写できるようになるのはどの位の発達段階にある時なのか。

本研究では、平仮名の各点画の中でもとりわけ難易度が高いと考えられる「はね」に関して、小学生の理解を促す学習展開や学習教材を開発するための基礎研究として、まず、前述の先行研究で幼稚園年長児対象に行った調査を小学校低学年（第１～２学年）対象に、また、平仮名五十音の書きぶりに関する調査を小学校第２～６学年（及び参考資料として大学生）対象に実施した上で、各種の点画の書き方を筆記具の持ち方と関連させながら分析し、それぞれの点画要素、特に「はね」を「はね」として再現できる発達段階について検証を試みる。

１．調査対象者（年長児・小学生・大学生）の硬筆筆記具の持ち方

グラフ１　鉛筆の持ち方 調査結果　(%)



本論考における筆記具の持ち方は、先述の拙稿①～③と同様、筆記具を把持した際の指と筆記具の接触箇所を筆記具の下部接触箇所３点（持ち方により２点）と筆記具上部接触箇所１点として、その上部接触箇所が右手人差し指の左側面・第２関節から第３関節の間の場合「上部接触箇所Ａタイプ〔略称「Ａタイプ」〕(＝望ましい持ち方)、右手人差し指の左側面・人差し指付け根の場合「上部接触箇所Ｂタイプ〔「Ｂタイプ」〕」、右手親指と人差し指との股の部分・親指付け根の場合「上部接触箇所Ｃタイプ〔「Ｃタイプ」〕」、他の持ち方を「その他」として分類する。

【調査実施時期】　年長児：2010(平成22)年７月　小学生：2012(平成24)年７月　大学生：2012(平成24)年７月

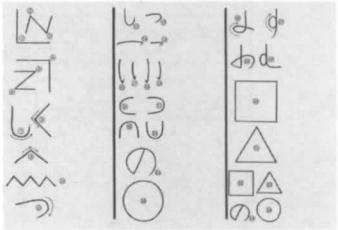
【調査実施園／校】　年長児：学校法人　円福学園　円福幼稚園（長野県長野市）
小学生：信州大学教育学部附属松本小学校　　大学生：信州大学教育学部

【調査対象者数】　年長児…87名　　大学生…国語教育分野以外の２年生40名
小学生…１年生64名／２年生76名／３年生37名／４年生35名／５年生34名／６年生36名

2．各持ち方で書かれた平仮名の用筆の比較－幼稚園年長児と小学校低学年の場合－

2-1　調査内容と分析方法

〈調査用紙〉

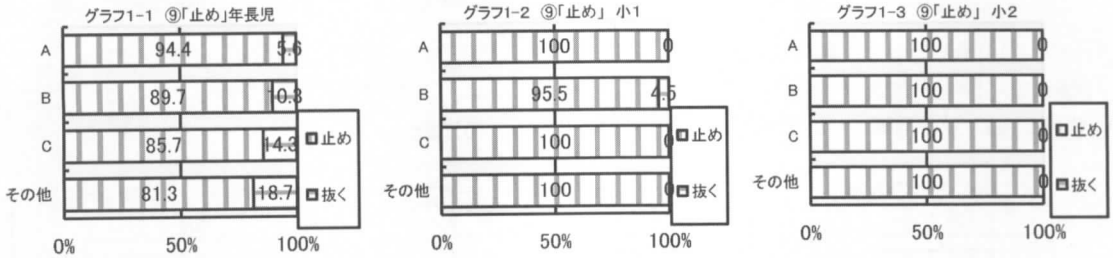


本論考では、平仮名の各種点画の書きぶりに関する幼稚園年長児と小学校低学年の児童との比較考察を試みるために、先行研究で当該園児に実施したものと同一の調査 －終筆部「止め」「払い」「はね」と送筆部「曲がり」「折れ」「結び」の６要素、及び園児・児童の身近に存在する図形を「調査用紙」（実物大Ａ３版）に記入する－ を小学校低学年の児童（第１学年２クラスと第２学年１クラスの児童．第２学年のもう１クラスでは次章に示す調査を実施．調査対象校は全学年２クラス配置）対象に行った上で、園児・児童が書く「線」を本検証の観点に沿った点画要素と重ね合わせ、学年と持ち方の別に比較分析する。

2-2　調査結果及び比較考察

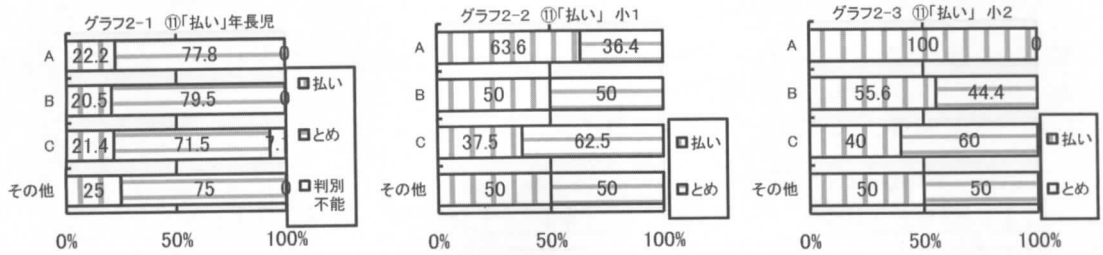
「2-1」での調査結果は、先行研究での方法と同様に、学年の別と持ち方の違いに従い44の観点から比較分析を行った。紙面の都合上、ここでは各要素の特徴が顕著に表れている６項目の調査結果を取り上げる。（グラフ中、年長児＝「年長児」・小学校１年生＝「小１」・同２年生＝「小２」と表記。）

2-2-1　止めの用筆について〔⑨「へ」終筆部「とめ」の比較〕



就学前後での違いが明らかである。これは就学後に受けている書写教育の成果の一つと捉えられる。ただし、本調査年長児でのデータを他の点画要素の場合と比較すると、就学後の良好な結果には、「止め」の難易度自身が低いことも大きく影響していると推測できる。「止め」は小学校低学年で十分習得可能な点画である。

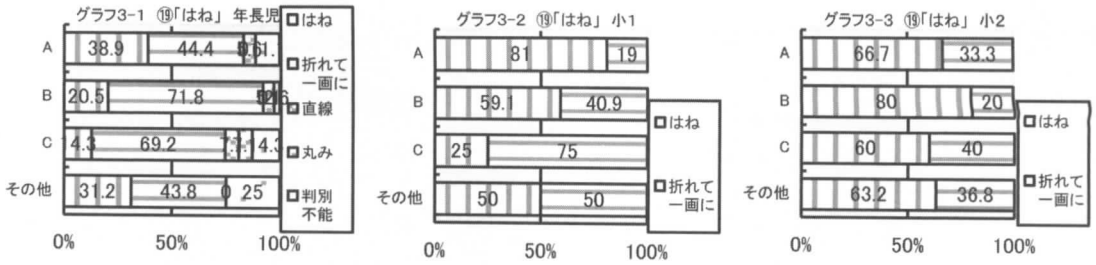
2-2-2　払いの用筆について〔⑪「つ」終筆部「払い」の比較〕



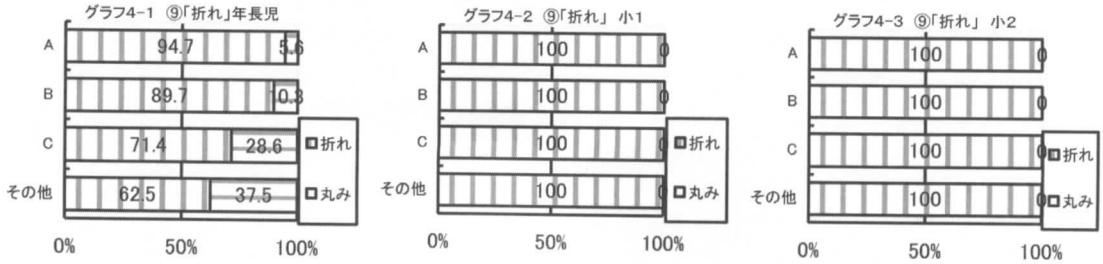
就学前後での差異、及び「止め」や後述「折れ」の習熟度との違いが歴然としている。「払い」は文字学習入門期の児童には難易度が高い用筆であるが、学年とともに持ち方の別による違いが大きく現れる。拙稿での調査から、持ち方の違いにより書かれた線や字形、特に「払い」と「はね」の用筆に顕著な差が現れることが判明した[1]が、本調査から小学校低学年の段階から持ち方に起因する運動性により基本点画の用筆が変わる実状が明白となった。

2-2-3　はねの用筆について〔⑲「か」１画め終筆部「はね」の比較〕

就学前の理解度がかなり低いため、一見すると就学後にその形や用筆に関する理解度及び習熟度が深化したように見受けられる。しかし、他の点画の場合と比較してみると、小学校低学年の児童にとって「はね」が如何に難しい要素であるか、その実状は如実に見て取れる。他の点画であれは、第２学年のＡタイプの児童全員が再現できているところ、唯一「はね」の用筆だけはちょうど３分の１の児童が再現できていない。年長児のみならず、小学校低学年の児童にとっても「はね」の難易度が高い様子は、他の要素に比して際立っている。



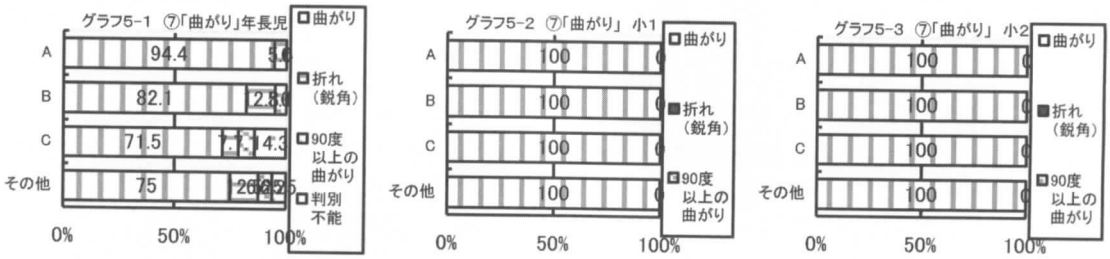
2-2-4　折れの用筆について〔⑨片仮名「へ」送筆部「折れ」の比較〕



「止め」の用筆と近似した結果であるが、年長児にとっての難易度は「止め」より「折れ」の方が高い。

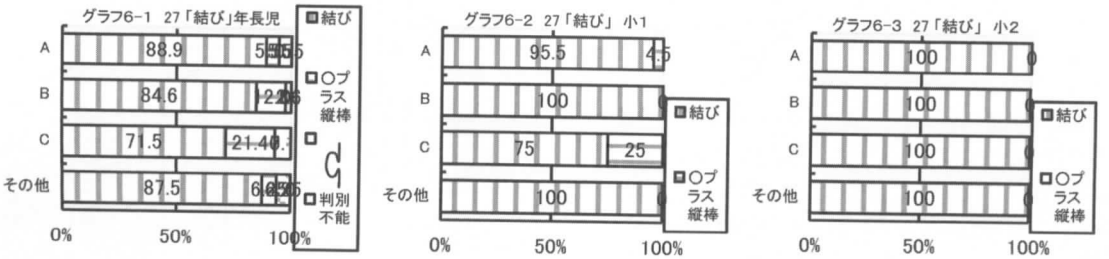
「止め」の用筆と同様就学前後の差が明白である。「折れ」は文字学習入門期に難なく習得できる点画と言える。

2-2-5　曲がりの用筆について〔⑦「し」送筆部「曲がり」の比較〕



「曲がり」も就学前後での理解度に大きな違いが存在する点画である。年長児には難しい用筆であるが、就学後、低学年における書写学習の中で自然に習得することが可能であることがわかる。

2-2-6　結びの用筆について〔「す」2画め送筆部「結び」の比較〕



年長児にとって「結び」は特に理解が難しい用筆である。しかし、小学校低学年での書写学習で一度「結び」の書き方が習得できてしまえば、以降用筆に関する問題は生じにくいと考えられる。

2-3　まとめ

就学前後で差異が現れる（小学校の書写学習開始と共に理解度や習熟度が好転する）のは「止め」「折れ」「曲がり」「結び」の用筆、就学後学習がある程度落ち着いた頃筆記具の持ち方により顕著な差異を示すのが「払い」の用筆、就学後少なくとも低学年の段階では持ち方の違いに関わらず理解習熟に難を示すのが「はね」の用筆である。

3．各持ち方で書かれた平仮名五十音の比較―小学校第2～6学年及び大学生の場合―

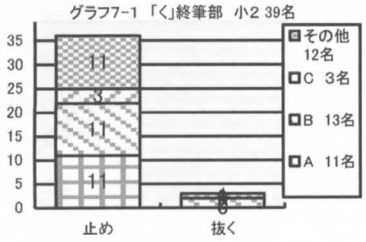
3-1　調査内容と分析方法

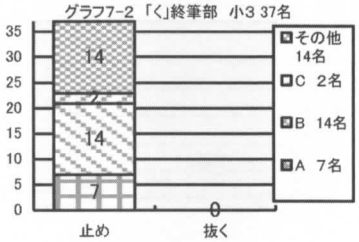
続いて、小学校第２～６学年の児童を対象に、平仮名五十音の書きぶりに関する調査（2.5cm四方のマス目内に平仮名五十音を書く）を実施した。なお、本調査を第１学年で実施しなかったのは、調査時は未だ平仮名学習の習熟が図られていない時期だったことによる。また、比較分析のため「**1**」の大学生にも同一の調査を実施した。

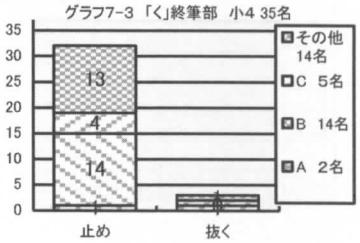
3-2　調査結果及び比較考察

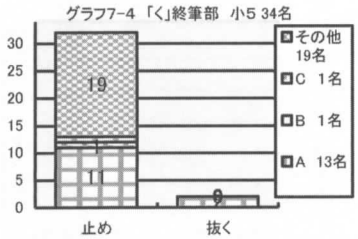
本章においても、「**2-2**」と同じく紙面上の都合から、象徴的な７項目の調査結果を取り上げ、比較考察を試みる。（グラフ中、小学校２～６年生を「小２」～「小６」、大学２年生を「大２」と表記。）

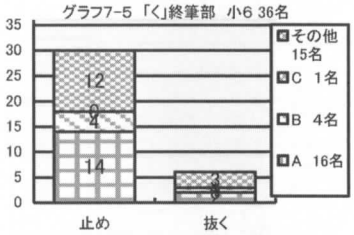
3-2-1　止めの用筆について〔「く」終筆部「止め」の比較〕（数値：「名」）

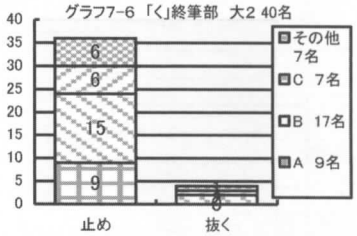






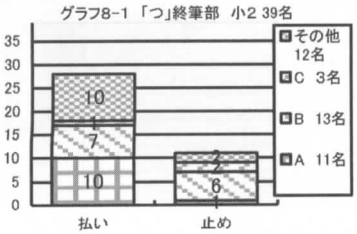


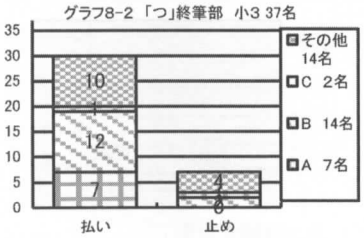


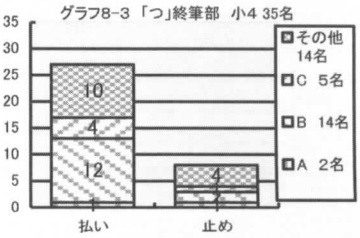


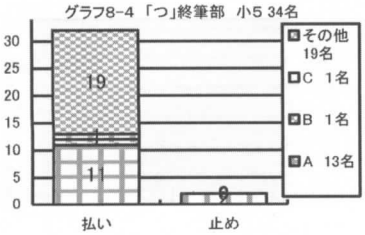
前章の通り、「止め」は難易度が低く低学年での習得が可能な故に、年齢層が高くなるにつれての乱れが目立つ。

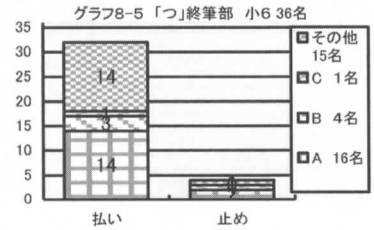
3-2-2　払いの用筆について〔「つ」終筆部「払い」の比較〕（数値：「名」）

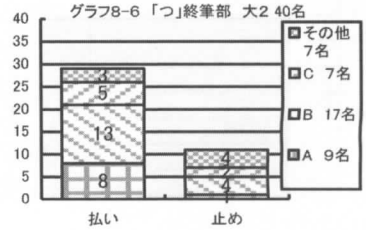








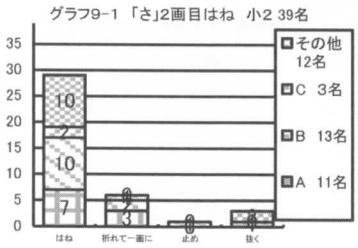


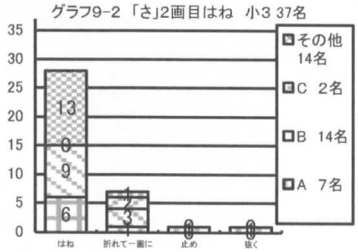


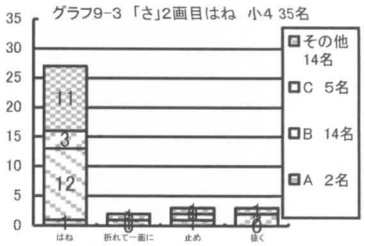
「払い」での前章の考察を裏付ける結果である。高学年での落ち着いた書きぶりと大学生の乱れも対照的である。

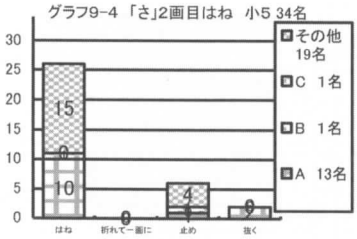
3-2-3　はねの用筆について

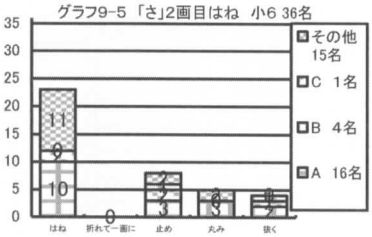
〔「さ」２画め終筆部「はね」の比較〕　（数値：「名」）

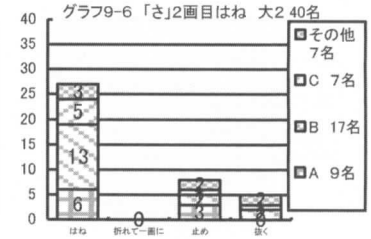




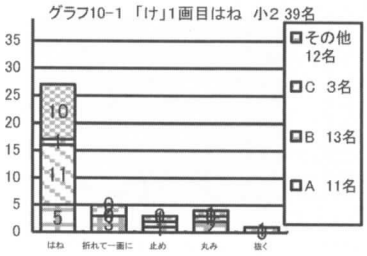


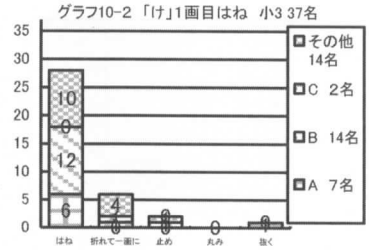


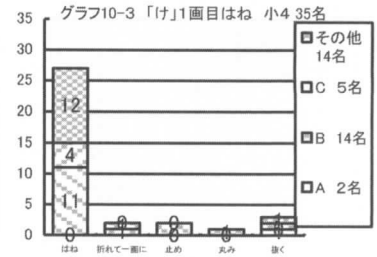


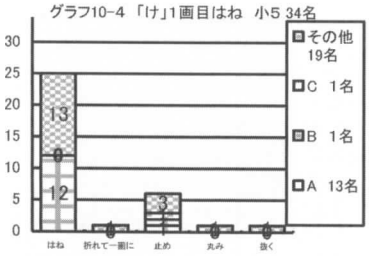


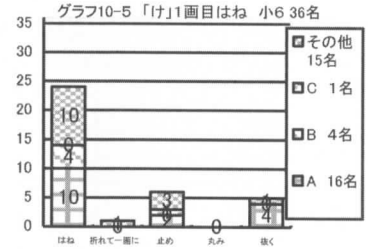
〔「け」１画め終筆部「はね」の比較〕　（数値：「名」）

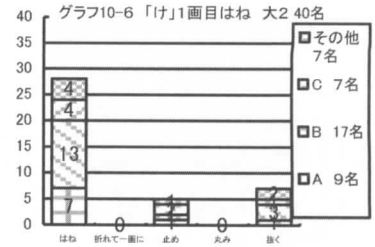




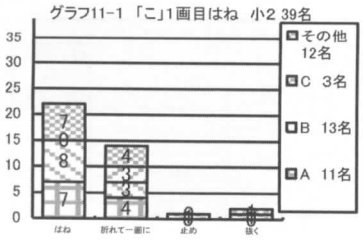


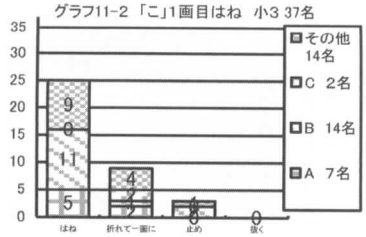


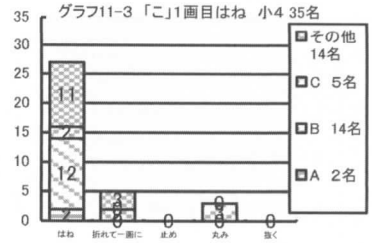


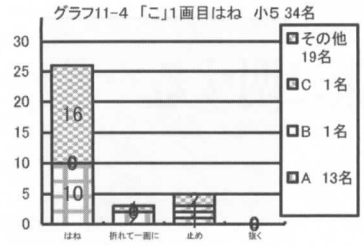


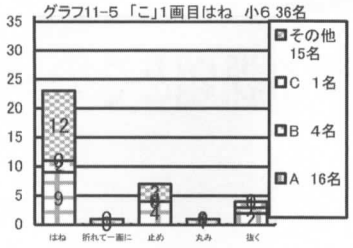
〔「こ」１画め終筆部「はね」の比較〕　（数値：「名」）

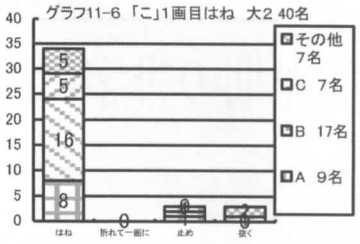






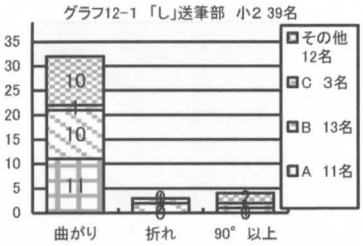


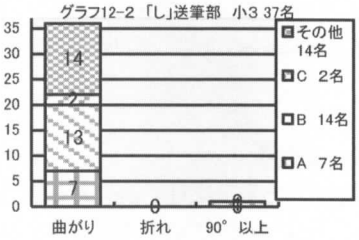


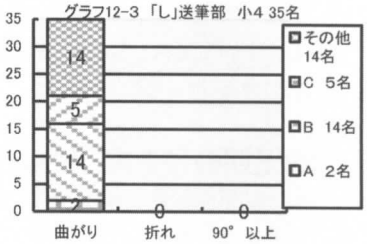


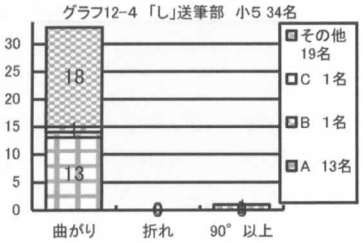
一般的な傾向として、「はね」を新たな一画として書かなくなる過渡期は小学校４～５年生（「さ」参照）、早くて３～４年生（「け」参照）だと言える。しかし、高学年でも「はね」を新たな一画とする書き方が一定人数存在する「こ」のデータから、「はね」は難易度の高い用筆だと再認識できる。なお、高い年齢層での抜く用筆や丸みを帯びる用筆は、年齢が上がるに従い生じる書写時の乱れである。学年進級に伴う平仮名指導への課題提起である。

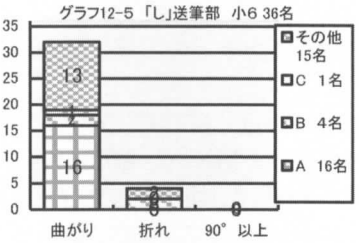
3-2-4　曲がりの用筆について〔「し」送筆部「曲がり」の比較〕（数値：「名」）

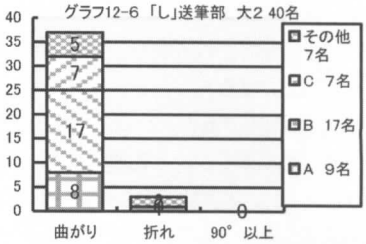












高学年や大学生でのデータから、この用筆が再現できるか否かは持ち方の別によるところが大きいと言える。

3-2-5　折れの用筆について〔「ん」送筆部「折れ」の比較〕　※グラフ省略

「そ」でのデータから低学年での習得が無理なく為される点画と言えるが、「ん」の折り返しに関しては、学年に関係なく丸みに転じる割合がかなり高い。これも持ち方の別に起因するものと考えられ、注意を要する点である。

3-3　まとめ

小学校中～高学年は、ⓐ「はね」を新たな一画でなく、本来の形や用筆により確実に再現できる過渡期ⓑ「はね」以外の点画も安定した書き方が可能ⓒ漢字の学習が進み、平仮名の成り立ち等平仮名を見直す切欠が内在する点と、高い年齢層では新たに平仮名の乱れが生じる点を勘案すると、量的だけでなく質的な変化も期待できる小学校中学年から高学年にかけてが、「はね」の学習や平仮名の学習を再考し立ち返らせる最適な時期と推察できる。

おわりに

本論考での調査結果から、就学前の幼児のみならず小学生にとっても、平仮名での「はね」は他の点画に比べ突出して難易度が高いことが明らかとなった。また、平仮名学習の深化を図る好機が小学校中学年から高学年にかけて訪れることも推考できた。今後は、その具体的かつ効果的な学習方法及び学習教材について検討を試みたい。

[謝辞] 本論考での調査に際し多大なご協力を戴きました信州大学教育学部附属松本小学校に深謝申し上げます。

1　小林比出代「硬筆筆記具の執筆法と字形の関係における分析的研究」／前掲書 83-84pp.